2020.9.22

大草

読書メモ

142.呉善花「日韓併合への道」文芸春秋（2012.7）

**＜呉善花「日韓併合への道」から＞**

日本に併合をされる事態を招いた韓国側の要因を、その国家体質・民族体質を踏まえながら、歴史的な事件とその経緯のなかから究明した本である。日韓関係を知るための必読書。

（反日義兵闘争の展開）

1907年から1908年にかけての日本軍の韓国への兵力増強以降、義兵闘争は分散化され、ゲリラ戦化していったと言われている。この時期は義兵闘争の最高揚期であり、解散軍人を含む平民出身の義兵将たちが続々と輩出し、彼らが各地で小部隊を編成することによって、義兵闘争は拡大していった。しかし、拡大していったが、結集力が強まったとは言えない。組織を超え、地域を越えて横へとつながる大同団結ができなかったのである。呉は、ここに義兵大敗の根本原因があるのではないかと思っているという。李朝―韓国が、家族・血縁を超えて地域的な連帯へ、地域を越えて国家的な連帯へという大きな流れを、併合時に至るまで生み出すことができなかったことは確かであった。

（愛国啓蒙運動の挫折）

共和主義的な思想を持つ都市知識人たちを中心に展開された愛国啓蒙運動は、独立協会運動を継承した国権回復運動で、その中心だったのは1906年4月に創設された大韓自強会である。大韓自強会は、内に対して愛国心を養い、外に対しては文明の学術を吸収し、教育推進と産業振興によって国力の自立増強を目指す運動を展開した。1907年以降は主として反日運動を展開するようになっていった。愛国啓蒙運動を展開した諸団体は、統監府（元日本公使館）により解散させられることになり、国民の支持を得ることができず、諸団体の連帯を生み出すことも出来なかった。

李朝の知識人たちは伝統的に両班の派閥闘争を繰り返し、開国以降は親日派、親清派、親露派、親米派、皇帝側近派などに分裂しての党派抗争を延々と繰り返してきた。（このため、社会的に大きな勢力となることはなかった。）

(日韓合邦運動へのアプローチ)

積極的に日本と同盟関係を強化し、さらに日韓合邦を推進していこうとする大衆運動も存在した。李容九をリーダーとする一進会が進めた日韓合邦運動については、「日本の傀儡団体・幽霊団体」による「欺瞞的な売国行為」という評価がなされてきた。当時、会員数14万人と報告されており、最大の勢力であった。

近代民族国家の形成において、民族独立ではなく他国との合邦を唱えて運動し、大衆の政治的支持を得た例がこれまでの「政治史上」にはなかったものであることは確かである。

政府、官僚、東学、独立協会などいずれも韓国が自立・独立国家への道を歩むための指導原理を示すことができなかった。そのような韓国政治社会の絶望的な状況を背景に、一進会の愛国合邦運動が台頭してきたことに注目すべきという。

ひとり日本のみが日清、日露の戦争に勝ち積極的に明治の改革を推進しており、頼れる存在であったということができよう。

当時は、「衛正斥邪」を唱えて伝統的な儒教国家としての自立を守ろうとする儒生たちの主張は、多くの農民たちの支持を受けていた。さらに、国王側近も政府も指導力が皆無に等しかった。←日本のように、開国・尊王攘夷などの思想で国家として一つになることが出来なかった。ここに独立国となれなかった大きな原因があると思う（大草）。

（大アジア主義と韓国併合）

李容九や内田良平らの日韓合邦論が多くの韓国人や日本人に支持され、また日本政府の要人たちの中にも共鳴する者たちがおり、さらには彼らに協力を約束する要人たちがいたのは事実だろう。なぜならば、アジア諸国の諸民族が互いに力を合わせて西欧のアジア侵出に対抗して共存共栄を図っていこうと言う理想主義(大アジア主義)は、日中韓の民意・民情を背景に大きな裾野を広げつつあったからである。

一国家一民族による近代民族国家の建設ではなく、諸民族が対等の資格を持って集まり、1つの国家を形成していこうという、広域アジア多民族連合国家建設の理念がある。

これを唱えた李容九らの理想は、国家を超えていたというよりは、国家意思に対する認識の甘さを物語るものといわなくてはならない。おそらく、華夷の思想を取り除いて相互敬愛を軸に結びつく、中華帝国に取って変わるアジア連邦をイメージしていたのだと思う。しかしそのためには、それぞれが民族国家の枠組みを超えての連帯を目指して行かなくてはならない。大東亜の合邦という超国家主義的な理想を、現実の民族国家に求め得るものと考えたところに、孫乗熙や李容九、内田良平や杉山茂丸の挫折の原因があったというべきであろう。

（韓国内での併合の原因追求）

李朝―韓国側の「併合への道をもたらした原因」を徹底して解明していこうとする動きは、少なくとも韓国内部からは現在に至るまで出てきてはいない。要するに、自らの側に外国による統治を招来させてしまった要因を探り当て、そこに深い反省を寄せて現在から未来への展望を持とうとする気持ちが、解放直後の韓国知識人の間に生まれることもなく、今なお欠落したままなのである。

呉は、李朝ー韓国の積極的な改革を推進しようとしなかった政治指導者たちは、一貫して日本の統治下に入らざるを得ない道を自ら大きく開いていったのであるという。彼らは国内の自主独立への動きを自ら摘み取り、独自に独立国家への道を切り開こうとする理念もなければ指導力もなかった。

韓国独立への道が開かれる可能性は、金玉均らによる甲申政変の時点と、彼らを引き継いだ開化派の残党が甲午改革を自主的・積極的に推進していこうとした時点にあった、というのが呉の考えである。李朝はいずれの場合も自らの手を持って、それらの国内改革の動きを潰したのである。前者は清国を恃みとし、後者はロシアを恃みとして行われたものである。

以後の李朝―韓国に独立への可能性は全くなかった。そこで登場したのが、李容九率いる一進会だった。彼らは、国家への絶望から出発し、民族の尊厳の確保を目指して日韓合邦運動に挺身した。

しかし、少なくとも民族の尊厳の確保に賭けて大アジア主義を掲げ、国内で最大限の努力を傾けた李容九らを売国奴と決めつけ、国内では表立った活動することなく外国で抗日活動を展開した安昌浩や李承晩らを愛国者・抗日の闘志と高く評価するといったバランスシートは、呉には全く不当なものと思えるという。

（日韓和解の条件）

韓国が自らの側の問題解明に着手し、さらに反日思想を乗り越え、小中華主義の残存を切り捨てたうえで、日本統治時代についての徹底的な分析に着手したとき、韓国にようやく「李朝の亡霊の呪縛」から脱出したといえる状況が生まれるだろう。日本はそうした方向へと韓国が進むことに期待すべきであり、その方向にしか正しい意味での日韓の和解はないことを知るべきだろう。

(李朝が独立国家になれなかった理由）

李朝は次のような政治的伝統を持っていた。

①世界に類を見ない硬直した文治官僚国家体制。

②中華主義に基づく華夷秩序の世界観。

③大国に頼ろうとする事大主義。

④儒教国家を保守する衛正斥邪の思想。

こうした李朝正統の流れに対して、唯一改革への可能性を示し続けたのが実学の流れだった。実学の流れは、金玉均らの急進開化派と金弘集らの穏健開化派の流れに分かれ、両派壊滅以後は、東学の流れと愛国啓蒙運動の流れに命脈を保った。それらに対して李朝正統は、儒生らの衛正斥邪派が義兵の中心勢力として最後まで力を持ち続けた。併合を前にして、この3つの流れはついに大同団結することがなかった。

李朝―韓国は、最初から最後まで、次の2つの伝統を乗り越えることができなかった。

①横のつながりを失った無数の極小集団がそれぞれ自己の利益を目指し、中心に向かって猛然と突き進むという伝統。

②すべての非正統的活動を執拗に排除しようとする嫉妬深い中央集権主義の伝統。

李朝―韓国は、上からの改革の芽を自ら摘み取り、なおかつ下からの改革の条件である挙国一致体制を生み出すこともできなかったために、韓国独立への道を自らの手で開くことができなかったのである。

（下からの改革の挫折）

下からの改革を巻き起こす第一の条件は、当時の大衆である農民の幅広い団結を生み出すところにあった。しかしこれら農民たちをリードできる知識人がいなかった。抗日闘争をした、独立運動をしたということで愛国者とされてきた人々については、農民を組織的に結集できなかった責任が強く問われなければならないだろう。なぜなら、それもまた日本に併合される事態を招いた大きな要因だからである。

（日本統治時代の評価）

日本統治時代の評価について、呉は、西欧のアジア植民地政策は搾取の一言に尽きるが、日本は内地と同一にする方針[[1]](#footnote-1)があり相応の政策が取られたという。大東亜戦争時代の皇民化政策は、戦時の特別措置であり、通常の統治政策とは異なる点に注意を要するという。呉は、日本統治時代については、中立的にプラス・マイナスを評価している。このため、日本統治政策の全てを日帝の悪とする韓国内においては、反韓活動家と批判され入国拒否の対象者とされている。日本統治時代の詳細も記述されているが、本稿では省略する。なお、呉は、1956年韓国済州島生まれ、1983年来日。1988年、32歳で日本に帰化した。

**＜この本を読み終わった後の感想＞**

①2000年間中国の属国であり、日本を見下してきた韓国の歴史を再認識した。

②韓国が自主独立できず、日本に併合された経緯がよく理解できた。韓国内に併合への賛同者が相当数いたことを知り驚いた。

③日韓関係を正しく理解するためには、「正しい歴史」を学ぶ必要があると痛感した。

④日本は、不寛容の韓国に対して、不寛容でいてよいか？寛容とは、相手の立場を理解したうえで、慈悲の心（あわれみ、慈しむ）を示す行為である。

⑤日韓和解の条件は、韓国側が握っていると著者はいうが、果たしてどうか？

**＜意見交換のテーマ＞**

　①日本の韓国併合の原因について、どう思いますか？

　②韓国の不寛容を日本が寛容することについて、どう思いますか？　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上

1. 欧米の植民地統治と異なる4点。

①収奪により内地を潤すという政策がとられなかったこと。

②武力による威圧をもって統治政策を全般的にとらなかったこと。

③文化・社会・教育の近代化を強力に進めたこと。

④本土人への同化を目指したこと。 [↑](#footnote-ref-1)